

細川文庫本「袖鏡」について

田坂, 憲二

<https://doi.org/10.15017/2332681>

出版情報 : 文學研究. 78, pp.65-84, 1981-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

細川文庫本『袖鏡』について

田 坂 憲 二

九州大学附属図書館細川文庫（宇土細川家旧蔵）に『袖鏡』と題する源氏物語の梗概書（五冊）が蔵されている。同本は、かつて稻賀敬二氏によって、源氏大鏡第二類本の一本として紹介されたものである。^{（註1）}私見によれば、細川文庫本『袖鏡』は、他の二類本諸本とは極めて異質の本文を有しており、一括して単純に二類本と呼ぶには問題があると思われる。両者の間には何らかの形で一線を画す必要があるのではないか。又『袖鏡』の文体、依拠本文は、源氏物語の梗概書全体の流れの中に於いて、極めて興味深い問題を提出してくれるようでもある。本稿は、細川文庫本『袖鏡』に関する、私なりの調査報告である。

一

まず『袖鏡』の書誌を記す。

整理番号「545ヶ60」大型の木箱入り。箱上蓋中央に「袖鏡 五冊」と墨書。本文の筆蹟とは異なるが、近世初期頃の細川文庫本『袖鏡』について（田坂）

字。同じく箱蓋左上部に「二番」「九十四」と墨書。大本（縦三二・七糎 横二五・二糎）の袋綴。五卷五冊。装禎は原装。料紙は鳥の子の勝った混ぜ漉き。表紙は薄茶色の鳥の子紙を二つ折りにしたものを付し、袋綴状になっている。従って見返しは表紙に同じ。外題は一冊目はこれを欠き、二冊目以下、表紙中央に「袖かゝみ 二（く五）」と墨書の打付書、本文と同筆。内題なし。第一冊は表紙が破損し見返し部分のみが残っており、元来は失われた部分に外題が書かれていたものと思われる。蔵書印は九州大学のもの以外に、各冊巻頭に「臥金山水」（未詳）の朱方印（二・〇×〇・九糎）をもつ。奥書・識語の類はない。

各冊の所収巻名、及び紙数は、以下の如くである。

第一冊	序・桐壺—花宴	墨付八八丁	遊紙首尾各一丁
第二冊	葵——少女	墨付一〇九丁	遊紙首のみ一丁
第三冊	玉鬘——若菜上	墨付九一丁	遊紙首のみ一丁
第四冊	若菜下——竹河	墨付七〇丁	遊紙首のみ一丁
第五冊	橋姫——夢浮橋	墨付七五丁	遊紙首尾各一丁

一面九行書。一行、一五〜二二字。墨書による振仮名・書入れがある、本文と同筆。

本文の記述の方法は、源氏物語中の和歌を五首を除いて全て掲げ（後述）、適宜源語の原文を挿入しつつ梗概を記し、引歌・引詩・語注・秘事等を付す。和歌は二字下げ二行書。地の文が後続することが多く、又、ほぼ全ての歌の右肩に詠者名を記す。引歌は三字下げ二行書。勘注は細字二行書のもの、やや小字で一行書のもの、地の文と同じ大きさのもの等様々である。書写年代は、書風・装幀等から考えて室町最末期頃と推測される。

稻賀氏が『袖鏡』以外に、源氏大鏡二類本の完本としてあげられたのは、次の四本である。

一、宮内庁書陵部蔵『浅聞抄』二卷一冊

二、刈谷図書館蔵『源氏浅聞抄』三卷三冊

三、永青文庫蔵『源氏浅聞抄』三卷三冊（以上、『源氏物語の研究』第三章第一節、昭42）

四、吉田幸一氏蔵『源氏物語拔書抄』二卷四冊（『古典文庫』四〇四、昭55）

以上四本のうち、既に解題の存する書陵部本『浅聞抄』^(注2)吉田本『拔書抄』^(注3)以外の二本の書誌を簡単に記しておく。

○刈谷図書館本『源氏浅聞抄』（函架番号1035）

大本（縦二六・八糎 横一八・二糎）の袋綴。三卷三冊。装幀は原裝。本文料紙は楮紙。表紙は厚手鳥の子、紺色無地。見返しは共紙。外題は、表紙左上部に題簽に「源氏浅聞抄 上(中、下)」と墨書。内題なし。各巻の墨付は、上卷七三丁（賢木迄）中卷八五丁（藤裏葉迄）下卷八四丁（若菜上以下）一面十行、一行二十五字前後。用字は漢字・平仮名。朱墨のミセケチ、異本校合、書入れがある、本文と同筆。又、朱で『湖月抄』の丁数を記す。奥書・識語の類はない。蔵書印は刈谷図書館のもののみ。村上忠順旧蔵本。近世中期写。

○永青文庫本『源氏浅聞抄』（函架番号8248）

大本（縦二六・二糎 横二一・四糎）の袋綴。三卷三冊。装幀は原裝。本文料紙は楮紙の勝った混ぜ漉き。表紙は厚手鳥の子、紺色無地、見返しは共紙。外題は、上中巻は表紙中央部の題簽に「源氏浅聞抄 上(中)」と墨書、下巻も同様に「浅聞抄目錄下」と墨書。題簽は何れも後補のものと思われる。内題なし。各巻の墨付は、上卷八四丁（明石迄）中卷七一丁（若菜下迄）下卷五五丁（柏木以下）一面十十三行、一行二十五字前後。用字は漢字・平仮名。若干の朱墨のミセケチがある、本文と同筆。寛永三年の奥書を持つ。^(注4)蔵書印は永青文庫のもののみ。奥書に記す寛永三年頃の写と思われる。

さて、稻賀敬二氏は、源氏大鏡の類を三系統(注5)に分けるに当って

(一)序文部分の検討

(二)本文部分の検討

を行われた。(注6)又、二類本に共通する要素として、

(三)少女巻333「このへを」335「うぐひすの」の両歌を欠くこと(注7)

も、指摘された。

以上三項のうち、『袖鏡』を二類本に含める時に問題となるのは第二項である。稻賀氏は、一〜三類の対立本文の具体的な比較のために、桐壺巻(注8)・花散里巻(注9)などを例示されたが、『袖鏡』に関する限り、以上の例だけでは不十分である。というのは、『袖鏡』は、朝顔巻辺りまでは、各巻巻頭の記述をのぞけば(次節参照)他の二類本諸本とはほぼ同文であるが、少女・玉鬘巻を境として、二類本系の本文とははっきりと異ってくる。以降の『袖鏡』の本文は、源氏大鏡の一〜三類の何れとも一致しない。具体的な例として初音巻をあげてみよう。正月一日夕方、源氏が明石君を訪れる場面である。

『袖鏡』	二類本
暮かゝるほどにあかしの御方へわたり給へれば、ちかきわた殿の戸をしあくより、みすのうちの	暮かゝる程にあかしの御かたへわたり給へれば、ちかきわた殿の戸をしあくよ

をひ風なまめかしくふきにははして、硯のあたり
 にきは、しくさうしともとりちらしけるをとりつ
 ぐみ給ふ、からのとうきやうきの 唐の東京錦とはにしき
 なり 事くしきはしきたるしとね、おかしけな
 る琴(マ)の打をき、よしある火桶に侍従をくゆらかし
 て物ことにしめたるを、えひかうの香のまかへる
 いとえんなり衣比香とはいまほとつけほしといふ物なりてなら
 ひとものみたれ打とけたるも、すちかはりゆへあ
 るかきさまなり、姫君の小松の御返しをめぐらし
 と見けるまゝに、あはれなる事ともかきませて
あかしの上
 めつらしや花のねくらに木つたひてたにのふ
 るすをとへるうくひす

こゑ待いてたる、なともあり、さけるをかへに家
 しあれはなと、ひきかへしなくさめたるすちなと
 かきませて

引替
 梅花さけるをかへに家しあれはともしくもな
 しょうくひすのこゑ

りけはひことに、空たき物心にく、か
 らの東京錦①の唐の東京のにしきなりはしきした
 るしとねに、きんの琴ををき、よしある
 火桶に侍従くゆらかして物ことにしめた
 るに、えひかうのにはひあひていとえん
 あり、衣比香②とは今ほとつけほしと云物也すりの
 あたりにははしく・てならひすさひた
 るをとりて見給へは、姫君の小松の御返
 しをめぐらしと見けるまゝに
明石上
 めつらしや花のねくらに木つたひて

谷のふるすをとへる鶯

さける岡へに、とあり、引歌

梅花さける岡へに家しあれはともし
 くもなし鶯の声

底本、吉田本『抜書抄』

- ①刈「東錦」永「錦」
- ②永ナシ
- ③刈「あて」書「あふ」
- ④刈「て」
- ⑤書・永「まゝ」に

「一・三類本」暮かゝる程にあかしの御かたへ渡りたまへれば、近きわたとの戸をおし明るよりけはひことに(に)、空たき物心にくゝ(なまめかしく)からの京の錦(とう京きの錦の)はしさしたるしとねに、きんの琴をき(をかしかけるきんうちをき)、よし有火桶に侍従をくゆら(か)して、ものことにしめたるに、ゑひかうの匂ひあひていとえんあり(なり)硯のあたりにきはゝた(ナシ)しく、手習すきひたる心(ナシ)を取て(見給へは、姫君の小松の御返しをめつらしと見けるまゝに、明石上)めつらしや花のねくらに木伝て谷の古すをとへる鶯(さける岡へになと、引哥 梅の花さける岡へに家しあればともしくもあらず鶯の声)

「底本、一類本系ノートルダム清心女子大学蔵黒川真頼旧蔵『源氏大鏡』、校異、三類本系東北大学蔵狩野文庫本『源氏無外題』」

「源氏物語本文」くれかたになるほとにあかしの御かたへわたり給、ちかきわたとのととおしあくるより、みすのうちののおひかせなまめかしくふきにははかして、ものよりにけたかくおほざる、さうしみはみえず、いつらとみまはし給に、すゝりのあたりにきはゝしくさうしともとりちらしたる(ける)をとりつゝみたまふ、からのき(とうきやうき)のことゝしきはしさしたるしとねに、をかしかけるきむうちをき、わざとめきよしある火をけにゝうをくゆらかしてものことにしめたるに、ゑひかうのかのまかへるいとえんなり(あり)てならひとものみたれうちとけたるも、すちかはりゆへあるかきさまなり、ことゝしう(ことゝしけに)さうかちなともさへかゝす、めやすくかきすましたり、こまつの御返をめつらしとみけるまゝに、あはれなるふる事ともかきませて、めつらしやはなぬくらにこつたひてたにのふるすをとへるうくひす、こゑまちいてたる、なともあり、さけるおかへにいゑしあればなと、ひきかへし(て)なくさめたるすちなとかきませつゝあるをとりてみ給つゝほゝゑみ給へる、はつかしけなり「底本、青表紙本系大島本、校異、河内本系尾州家本」

『袖鏡』は、量的にも他の二類本諸本の約一倍半に増加しているが、注目すべきは、文体そのものの相異である。

『袖鏡』が源氏物語の本文を適宜省略しながらほぼ原形のまままで引用するのに対し、他の二類本は——一・三類本も含められるが——源語の原文に思い切つて手を入れ簡略化している。『袖鏡』は源語本文に密接な文体、吉田本『抜書抄』以下は梗概書として練れた文体、といえよう。例えば、この明石君訪問の場面を『袖鏡』は「こなたにとまり給ぬ」と源語本文そのままの形で締括するのに対し、一・三類本全て「冬のまぢにとゝまり給ひぬ」と、読者にとって

馴染みの「冬の町」という語に置き換えていることも、その一例と言える。猶、参考として掲げたように、一・三類本の当該箇所は吉田本等と類似の文章であり、『袖鏡』の文章が、他系統の源氏大鏡諸本との接触によるものでないことも、併せて確認しておきたい。

『袖鏡』と、他の源氏大鏡諸本との、質的・量的相異の甚しい例を今一つだけあげておく。鈴虫巻、中秋十五夜鈴虫の宴の直前の場面である。

『袖 鏡』	二類本
<p>夕くれに、けんしわたり給ひて御らんするに、みやはほとけのおまへにおはして十五夜の月なかめ給ふ、わかきあま君たち二三人花たてまつるとて、ならすあかつきのをと、水のけはひなときこゆる、さまかはりたり、「けにこゑくきこえたるなかに、すゝむしのふりいてたるほとはなやかにをかし、秋のむしのこゑいつれとなきなかに、松むしなんすくれたるとて、名にはたかひて、いのちのほとはかなきむしにそあるへき、心にまかせて、人きかぬおく山はるけき野の松はらにこゑおしまぬも、いとへたてこゝろあるむしになんありける、すゝむしは心やすくいまめいたるこそらうたけれ」</p>	<p>けんしいまもしけくわたらせ給ひて、むしのねきためをし給ふ、十五夜の月のかけかくしたる程、いとなまめかしくみゆ、「松虫は名にはたかひていのちの程はかなし、又へたて心あるものにて、人きかぬ野の松はらおく山なとにこゑおしまぬを、すゝむしはなに心なく、いまめきたるこそらうたけれ」</p> <p>底本、吉田本。 ①②永ナシ</p>

『源氏物語本文』十五夜の（つきのまたかけかくしたる）夕暮（のほと）に、ほとけの御まへに宮おはして、はしちかうなかめ給つゝねんすし給、わかきあま君たち二三人花たてまつるとて、ならずあかつきのをと、水のけはひなときこゆる、さまかはりたるいとなみにそゝきあへるとあはれなるに（中略）けにこゑくきこえたるなかに、鈴虫のふりいてたるほとはなやかにおかし、秋の虫のこゑいつれとなき中に、まつ虫なんすくれたるとて、中宮のはるけきのへをわけていとわさとたつねとりつゝはなたせ給へる、しるくなきつたふるこそすくなかなれ、なにはたかひて、いのちのほとはかなきむしにそあるへき（いとまれにほのめくねなとけにこそことなれ）心にまかせて、人きかぬおく山はるけきのゝまつ原にこゑおしまぬも、いとへたて心あるむしになんありける、鈴虫は（いと）心やすくいまめいたるこそらうたけれ「底本、大島本。校異、尾州家本」

『袖鏡』には存している、女三宮・尼たちの描写が、吉田本以下には欠けていること、吉田本以下には「むしのねきため」という、内容を一語で要約する詞が補われていることなどが注目されよう。又、松虫・鈴虫を比較する源氏の言葉も、原典に即自的か、要約的かという差異のあること、初音巻と同様である。猶、ここでも、一・三類本は、吉田本以下とほぼ同文である。

以上の二例は、同じ場面を叙するにあたっての記述の相異であったが、一方が記事そのものを欠く場合もある。例えば『袖鏡』の螢巻の冒頭の記述約二五〇字分を二類本諸本（一・三類本も）共通してこれを欠き、逆に、二類本諸本（一・三類本も）に存する御法巻々末の記事約一五〇字分が『袖鏡』には欠けている。このような例は巻頭巻末にのみ限られるのではなく、巻中にも多出し、相互に補い得る記事の欠落箇所は、一〇〇字前後の長文のものだけでも十数例指摘することができる。

叙上の如く、少女巻以降の『袖鏡』の本文は、他の二類本諸本——一・三類本も含めてよいが——と大きく異っている。『袖鏡』と二類本諸本との懸隔は極めて甚しく、同系統の本文として対校可能な域を、大きく逸脱しているのである。一方、吉田本・書陵部本・刈谷図書館本・永青文庫本は、相互に十数字以内の小規模な異同か、誤写によるものと思われる脱文しか存せず、これら一群のものと『袖鏡』を同列のものとして一括して二類本と呼ぶことは、再

考の余地があるのではないかと思われる。

三

それでは、細川文庫本『袖鏡』は、源氏大鏡の類の諸本の中で、どのように位置づけられるべきであろうか。考えられる可能性としては、次の二つがある。

(一) 第二類本を、流布本系・異本系の二系統に再分化させ、『袖鏡』を二類本系の異本とする。

(二) 新たに、第五類本を系統として立て、『袖鏡』を位置づける。

前節で掲げた、初音・鈴虫巻の二例は、共に一々三類本全てが類似の本文であり、『袖鏡』のみが特異な文章であることから、『袖鏡』を新たに第五類本として分類することが妥当とも考えられるが、私は、次の二点から、『袖鏡』は二類本系の一異本として処理する方が適切であると考ええる。

理由の一は、稻賀敬二氏が述べられた、序文、桐壺巻、帚木巻を含めて、朝顔巻迄に至る部分の『袖鏡』と他の二類本諸本との酷似性、及び少女巻の共通歌(333・335)を欠くこと、である。

理由の二は、以下のようなものである。『袖鏡』の叙述方法の大きな特色として、源氏物語原典の文章を活用しようとする姿勢がみられるが、この謂わば「原典志向性」は、二類本そのものの中に萌芽として認めることが出来るのではないかと思われる。それは各巻々頭の記述の方法から窺える。

源氏大鏡の類は、源氏物語の各巻々頭の原文を引用することから巻々の記述を始めることが比較的多く、長短精粗の差はあるが、約三分の一の巻は諸本共通して原典を引いている。ところがこれら以外の巻でも、一・三類本は巻頭の原文を引かないのに、『袖鏡』をも含めて、二類本のみが巻頭原文を引用する巻が、桐壺・帚木・空蟬・須磨・野分

・藤袴の六巻にも及んでいる。これらの中には、帚木巻のように、約百字もの原文を引用する巻もある。原典を補っていることが分りやすい、須磨・野分巻の例を示す。(△ ∨ の中が、源語の原文である)

二 類 本

△世中いとわつらはしくはしたなき事のみまされば、せめてしらすかほにありへても、是よりまさる事もや、とおほしなりぬ∨此心は、おほろ月夜の内侍のかみに源氏忍ひつゝあひ見給ふ事たえず、櫛の末に父右大臣のかたへ内侍のかみ里いてし給ひし時、

一・三類本

おほろ月夜の内侍の督に源氏忍つゝ見給ふ事絶す、櫛の巻の末に父右大臣の方へ内侍のかみ里出し給ひし時、

①ナシ ②里へ

③おほしける時

△中宮のおまへに秋の花うづさせ給へる事、つねのとしよりも見所おほくいる草をつくして、よしあるくろ木あか木のませをゆひませつゝ、おなしき花のえたさしすかた、あさゆふ露のひかりをよのつねならず、玉かとかゝやきてつくりわたせる野へのいろをみるに、はた春の山もわすれてすゝしうおもしろく心もあくかるゝやうなり∨野分れいのとしよりもおとろくしくふきいてゝ花^④としほれまして、草むらの露の玉をみたるゝ

野分れいのとしよりおとろくしく吹出て、本あらの小萩も、待えたる風のけしきなり

まゝに、御心まごひもしぬへくおほしたり、みなみのおとむら

さきのうへもせんさいつころはせ給ひけるもとあらのはきはき、

①はしたなくまちえたる風のけしきなり

①花を ②も ③④ナシ

底本『袖鏡』。校異、吉田本。

底本、一類本。校異、三類本

一・三類本のように、冒頭の原文を引かなくとも、梗概の記述は決して唐突ではない。寧ろ、二類本の方が、梗概記述に先立って冒頭の文章を補っているかのような印象さえ与えられる。二類本が巻頭の原文を補ったとすれば、それは少しでも多くの原文を引用することにより、原典の趣きを読者に伝えようとする姿勢の現れではあるまいか。著名な各巻の巻頭の原文を引用することは最も効果的であろう。これを「原典志向性」の萌芽と見ることが出来るのではあるまいか。

ところで、各巻々頭の原文の引用は、一・三類本より二類本流布本、流布本よりも『袖鏡』と、その頻度は高まっています。一・三類本、二類本流布本何れも巻頭の原文を引用しない巻は、

若紫、末摘花、紅葉賀、葵、賢木、花散里、濤標、関屋、絵合、松風、薄雲、朝顔、胡蝶、螢、篝火、行幸、若菜上、若菜下、横笛、御法、竹河、椎本、早蕨、宿木、東屋、手習、夢浮橋

の巻々であるが、このうち*印を付したものを除く二十一の巻は、巻頭の原文を補っている。これらの中には、紅葉賀巻や藤袴巻のように、百字以上もの源語の原文を引く巻もある。『袖鏡』は、二類本流布本の、源語巻頭原文への傾斜を、より徹底させていると言えよう。

以上あげた二つの理由から、『袖鏡』を二類本系の異本として位置づけることを仮定として、以下の論述を進める。

四

次に、『袖鏡』がどの系統の源氏物語の本文に基いて書かれているのかを考察してみる。梗概本の依拠本文を認定することは、梗概化に際して原典を自由に改変することが多いために困難であるが、前節で述べたように、各巻々頭の部分は比較的原典の趣をそのまま伝えており、考察の対象として相応しかろう。ここでは、少女巻の巻頭をとりあげ、比較のために、吉田幸一氏蔵『源氏物語抜書抄』を対校してみた。

年かはりて宮の御はても過ぬれば、世の中いろあらたまりて、衣かへのほと^④なといまめかしきを、ましてまつり^⑦のころ、大かたの空のけしき心ちよけなるに、前斎院はつれ／＼となかめ給ふ、おまへなる權のした風なつかし^⑩きに、大殿よりみそきの日はいかにのとかにおほさるらんと、とふらひきこえさせ給へり^⑪

①かへりて ②すき ③たる ④ほと ⑤ナシ ⑥ナシ ⑦賀茂のまつり ⑧空も ⑨を ⑩給ふに ⑪ナシ
は大殿より ⑬のとやかに ⑭給ふ 底本『袖鏡』 校異『抜書抄』

依拠本文の系統を認定するのに有益な手掛りとなるのが、②④⑥⑧⑫の部分である。この部分は、『袖鏡』の語句は青表紙本と一致するのであるが

②すき (河内本諸本、別本国冬本)

④ほと (別本阿里莫本) ほとも (別本陽明本、別本麦生本)

ほとは (別本国冬本)

⑥ナシ (別本国冬本)

⑧空（河内本諸本） 空も（河内本大島本） 世の空も（別本国冬本）

⑫みそぎのひ大殿より（別本讃岐本、別本保坂本）

というように、吉田本『抜書抄』は別本系の本文と一致するのである。ちなみに、一類本系黒川本は②④⑥⑧⑫何れも別本系の本文であり、青表紙本の色彩が強いついわれる三類本系狩野文庫本も⑥の例以外は別本系の本文に一致している。従って『袖鏡』は青表紙本系の本文に依拠しているということが、かなり強く推測されるのである。

梗概書の依拠本文を考察する場合最も有効な手段としてあげられるのが、改変されることの極めて少い和歌本文の利用である。『袖鏡』も、和歌本文を検討することによって、次のような傾向があることを窺うことができる。

(イ)『袖鏡』が青表紙本に一致し、河内本・別本と異ることが多い。

358風ふけは浪の花さへ色みえて（色みゆる——河・別。以下同）
(注10)

525わか宿からの秋ぞかはれる（とき）

545又さしまさる関のいはかと（いはとよ）

653おなしどころによりもあはなん（こゝろ）

756しのひねや君もなくらんかひもなき（はか）

一類本系黒川本、二類本系吉田本は、何れも河内本・別本系の本文に同じ。三類本系狩野文庫本は、653以外は

『袖鏡』に同じ。

(ロ)『袖鏡』が青表紙本・河内本に一致し、別本と異ることが多い。

523心もて草のやとりをいとへとも（いほり——別。以下同）

566おもひのほかになほそほとふる（われ）

668いつそやも花のさかりに一目見し（たより）

細川文庫本『袖鏡』について（田坂）

一類本系黒川本、二類本系吉田本は何れも別本系の本文に同じ。三類本系狩野文庫本は『袖鏡』に同じ。
(ハ)『袖鏡』が青表紙本系に一致し、一類本系黒川本、二類本系吉田本の独自異文と対立することが多い。

295 久方のひかりにちかき名のみして(雲る——黒・吉。以下同)

308 あさからぬしたのおもひをしらねはや(心)

319 あはれをそふるをしのうきねか(ひと声)

380 もとのかきねを人やたつねん(まかき)

544 こひしさのなくさめかたきかたみにて(なき人のおも影はかり身にそへて)

661 心もゆかぬあけくれの道(しのゝめの道)

771 松虫の声をたつねてきつれとも(こしかとも)

778 ふるかはのすきのもとたち知らねとも(二もとの杉の木たちは)

779 なかむる袖に露そみたる(こほる)

三類本系狩野文庫本は『袖鏡』に同じ。

以上の三点からも、『袖鏡』が青表紙本系の源氏物語に基いて記述を進めていることが認められるであろう。

ただ留意しておかねばならないのは、『袖鏡』と青表紙本との関係が緊密であるのは、他の二類本諸本との懸隔が甚しい少女巻以降に限られるということである。勿論、少女巻以降の『袖鏡』の独自の部分が如何なる系統の源語の本文に依拠しているのかを究明することが最も重要ではあるが、朝顔巻以前においては他の二類本同様、別本との関係も比較的密であることを確認しておきたい。『袖鏡』が別本系の本文であり、青表紙本系の本文と対立する例を一、二あげておく。

37 いかはかりかはおもひわつらふ(夕顔、みたるる——青、以下同)

136 ねなゝきそへそ野への松むし(賢木、なくねなそへそ)

ちなみに、一類本系黒川本は共に別本系の本文であり、三類本系狩野文庫本は、37「みたらるわつらふヒヒヒヒ」136「なくねなそへそ」と、青表紙本系に近い。

猶、少数ではあるが

30 ちきりたえすな(別、黒) ↓ ↓ たかふな(青、吉、袖) (夕顔)

620 いかにしてすたちけるそと(別、黒) ↑ ↓ いかてかく(青、吉、袖) (橋姫)

のように、吉田本『抜書抄』と『袖鏡』が共に青表紙本系に一致して別本系の本文と対立する例が、少女巻の前後何れにも存在することも付記しておく。

ともあれ『袖鏡』が他の二類本と離れば離れるほど、青表紙本系の本文に近づいていくとは言えると思う。

五

次に問題となるのは、『袖鏡』と他の二類本諸本との先後関係である。源氏物語の梗概書は、不斷に増補・改定を繰り返しているので両者の先後関係を見極めることは、極めて重要である。

源氏大鏡の類は、別本系の本文から次第に青表紙本系の本文へと修正され、それは中世における源語本文の流布状況と軌を一にすることが屢々指摘される。(註)前節の検討で得られた『袖鏡』と青表紙本の関係をこの公式にあてはめてみるならば、流布本系の二類本を大幅に改定したものが『袖鏡』である、という見取図が成立するであろう。この想定を補強する材料が今一つ存する。それは、物語歌の配列の方法である。

源氏大鏡の類では源語の和歌をほぼ全て引用するものの、梗概を述べやすくするために、和歌の配列は必ずしも源

氏物語におけるそれとは重ならない。例えば、横笛巻で夕霧が一条宮を訪れる場面では、源語では、515「こといいて
 へ」516「ふかきよの」517「つゆしけき」518「よこふえの」の順で歌が記されるが、源氏大鏡一〜三類本の諸本ではい
 ずれも、517 518 515の順に並べられている。このような例は、二類本だけに限っていえば、九箇所存する。

須磨 192 191 朝顔 316 317 313 314 315 初音 361 360 螢 378 379 376 377 藤袴 405 404 横笛(前掲) 夕霧 534 535 533 同 537 541 542 538 539 540 543
 手習 792 788 789 790 791

これらのうち、初音、螢、横笛、夕霧 533〜535、手習の五例は、『袖鏡』では、源語本来の歌順で配列されている。こ
 れは、二類本の祖本では転倒した歌順であったものを、『袖鏡』又はその親本が、源氏物語本来の順番に戻したと考
 えるのが自然ではあるまいか。

とりわけ注目すべきは、藤袴巻末、出仕間近の玉鬘に懸想人たちが次々と文をよこす場面である。二類本系流布本
 では次のようになっていいる。吉田本で示す。

またむらさきの上の御あに右兵衛督は、せんたいのしきふきやうの御ちやくしそかし、

これも玉かつらへ

^{四〇五} わすれなんと思ふも物のかなしきをいかさまにしていかさまにせん

ほたるの兵部卿の宮よりも

^{四〇四} あさ日さす光をみても玉さゝのはわけの露をわけすもあらなん

おほしたにしらはなくさめかたもありぬへくなんとて、いとかしけたるしたおれの露お

とさすもてまられる、御つかひさへそうちあいたるにや

A₂

A₁

B

源語の本文では、A₁A₂の順番に記されているが、玉鬘は懸想人たちの中で螢宮にだけは返事を認ており、その玉鬘
 の歌を螢宮の歌と連続するように配列することが、歌順を入れ替えた源氏大鏡の眼目であっただろう。一方、『袖

鏡』の当該箇所は次のようになっている。

螢の兵部卿の宮より

あき日さすひかりを見ても玉さゝのはわけの露をけたすもあらなん

又紫上の御あに左兵衛督は、先帝の式部卿の宮の御ちやくしそかし、これも玉かつらへ

わすれなんと思ふも物のかなしきをいかさまにしていかさまにせん

おほしたにしらはなくさむかたもありぬへくなんとて、いとかしけたる下おれの露もお

とさすもて参れる さゝのはにつけたるなり 御つかひさへそうちあひたる

「おほしたにしらは」以下は、螢宮の歌に接続すべき箇所であるが、この『袖鏡』の記述によれば、左兵衛督の歌に続くような誤解を与えかねない。これは『袖鏡』又はその祖本の筆者が、405・404の和歌の配列の転倒にのみ眼を奪われ、歌順を是正することにだけ気をとられていたためであると思われる。地の文の転倒は、和歌のそれに比べれば、よほど注意深く見るか原典と細かく対照させるかをしなければ、見落されがちのものであろう。ただこの歌順を入れ換えた筆者、もしくは後人は、左兵衛督の歌と以下の部分の不連続性に気づいたのであろう。二類本流布本には存しない「さゝのはにつけたるなり」という一文を補って、A₂の箇所が螢宮の歌に接続するものであることを明示しているのである。

一般的に言っても、又藤袴巻の例を見ても、転倒した歌順であったものを源語本来の姿に戻した、と考える方が、その逆を想定するよりも、極めて妥当であると言えよう。従って、この歌順の問題は、『袖鏡』系の本文が流布本系の本文を基に、大幅に改定して成立した、という推測を、強く裏付けるものであると思われる。

猶、歌順・場面の配列の是正という点でも、二類本諸本そのものの中にその萌芽が見られる。例えば、源氏と藤壺宮の経緯が一・三類本では帚木巻で語られるのに対し、二類本諸本は源語同様に桐壺巻で述べている。^(注12)このような点

から考えても、『袖鏡』系の本文は、二類本流布本系の本文が確立された時期から極めて近い時点で別れたか、或いは初稿・再稿本という関係にあるのではないか、とも考えたいのであるが、今は推測の域を出ない。ともあれ『袖鏡』や、流布本系の最古の書写本吉田本が写されたのが慶長年間と推定されているから、室町期には二類本系の二本の本文が確立していたことは確実である。

最後に『袖鏡』が欠く源氏物語歌を示しておく、前述の二類本に共通の少女巻の例の他に、夕霧巻541「いつとかは」542「あさゆふに」手習巻793「やまさとの」の三首である。^(注13)一方、手習巻780「やまさとの」781「うきものと」の二首は、源氏大鏡の諸本は一〜三類とも共通してこれを欠くが、^(注14)『袖鏡』には、この二首が存している。

六

さて、従来源氏大鏡第二類本として、書陵部本・刈谷図書館本・永青文庫本『浅間抄』、吉田本『抜書抄』などと同等に扱われてきた細川文庫本『袖鏡』は、これら諸本に対して異本的立場に立つものであることが明確となった。更に『袖鏡』もしくはその祖本は、書陵部本以下の流布本の祖本を基に大きく改変したものであることも認めてよろう。『袖鏡』は、二類本の中でも特異な注目に値する一本である。

今一つ注目すべきは、この改定の行い方である。二類本そのものの中に原典志向性は内在していたが、『袖鏡』はその傾向を徹底させている。一類本から二・三類本へと、原典志向性、就中青表紙本への志向性は認められるが、それらは多く改定の容易な和歌本文の範囲に留っており、本文そのものをこれほどまでに源氏物語の原典へ接近させたものは類を見ない。その意味で貴重な資料であると言えるだろう。

又、梗概書の歴史という点から考えても興味深いものがある。現存している源氏物語梗概書の最古のものの一つと

して、鎌倉期の書写にかかる天理図書館蔵『源氏古鏡』^(注15)があるが、同書は、殆ど源語の原文を適宜切断し組み合わせるだけで、梗概化に際して文章を書き改めることはあまり行っていない。^(注16) 謂わば、缺と糊によって源氏物語を梗概化しているのである。又、源氏大鏡の類に先行すると言われる『光源氏一部歌』^(注17)（島原松平文庫蔵）も、源語の原典に忠実な文章である。ところが、その後出現した源氏大鏡一類本は、源氏物語の本文に思い切つて手を入れ、平易な文章に改めて、梗概を理解しやすい形となっている。一類本源氏大鏡の文体は、多少は改められながらも、梗概書としての文体として定着し、二・三類本へと継承されていく。然るに、『袖鏡』に至つて、梗概書としての平易な文体から、源氏物語原典へ即自的な文体へと回帰しているのである。『袖鏡』は、梗概書の文体史の上でも注目すべき資料であると思われる。

注

- (1) 『源氏物語の研究―成立と伝流―』第三章第一節（昭42）
- (2) 『図書寮典籍解題・文学篇』190頁
- (3) 『古典文庫』四〇四、解説。
- (4) (注1)書、172頁に翻刻されている。
- (5) この他、一〜三類以外のものを一括して四類本とされている。
- (6) (注1)書。
- (7) (注3)書。
- (8) (注1)書。
- (9) 「注釈史から享受史へ―今川範政『源氏物語提要』の周辺―」（『源氏物語の探究・第四集』昭54）
- (10) 『物語和歌総覧』の番号による。以下同じ。
- (11) (注1)書。今井源衛先生『祐倫光源氏一部歌』解説（昭54）など。

細川文庫本『袖鏡』について（田坂）

(12) 稲賀氏の指摘がある。(注1)書。

(13) 542、793の歌は、一々三類本の何れにも存する。

541の和歌は、源氏大鏡の諸本によって異同がある。一類本系黒川本、二類本系吉田本・書陵部本・永青文庫本は、541の歌の替りに「とにかくに人めつゝみをせきかねてしたになかるゝをとなしのたき」(出典不明、伊行釈が行幸巻の巻頭で引歌とする)の歌が入り、二類本系刈谷図書館本では「とにかくに」の歌の後に541の歌を挿入する。又三類本系狩野文庫本は、源語のまま541の歌が存する。

(14) 稲賀氏の指摘がある。(注3)書。

但し、刈谷図書館本、狩野文庫本は、細字で補入する。

(15) 佐佐木信綱旧蔵本。『天理図書館稀書目録』和漢書之部・第二に略解説がある。

猶、同書に關しては、別稿の予定。

(16) 桐壺卷には、僅かながら、文章を梗概本に相応しいような簡略なものに改めた例がある。

(17) 今井源衛先生の説による。(注11)書。

(付記)

本稿を成すにあたり、貴重な御所蔵本の調査を快く御許可下さり、御高配を賜りました宮内庁書陵部、刈谷図書館、永青文庫に
対し、深謝申し上げます。又、大切な資料を御貸与下さいました今井源衛先生に御礼申し上げます。